
魔術師な俺と勇者な女

森林 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師な俺と勇者な女

【Nコード】

N6290X

【作者名】

森林 樹

【あらすじ】

ベガ王国で冒険者をやっていた俺こと魔術師のエレン・ブランディ。

王からの依頼で、勇者と一緒に魔王討伐の旅に出ることになった。

しかしその勇者は大陸でも珍しい俺と同じ黒髪で……

あるうことが異世界からきたらしい。

これはそんな俺と彼女と、その他連中の旅の話……になる予定。

この作品はArcadiaにも投稿してます。

1話 王からの依頼

窓から差し込む朝日に顔を顰めながら、ベッドの中でぼりぼりと腹を掻いた。

「くあああ……ああー……」

欠伸を一つ盛大にかまし、毛布を蹴飛ばして立ち上がる。
寝ぼけた眼を覚まさせるために洗面所に向かった。
昨日汲んでおいた桶の中の水を使って顔を洗う。
冷たい水が、俺の頭から眠気を吹き飛ばした。
面を上げれば壁に備え付けた鏡に俺の顔が映る。

「ああ、今日も辛気くせえ顔だことで」

この大陸じゃ珍しい黒髪に黒眼。

あまりやる気の感じられない目をした男の顔がそこにあった。
別に気にしちやいないが、この髪の色をしたやつはこの王国で自分
以外はあまり見かけたことはない。

少なくとも、俺が住んでいる王都には俺以外の黒髪なんて一人もいない。

つっても王国領から出たことなんて数えるくらいしかないからなあ。
他の国にはそれなりにいるかもしれないが……

俺の両親は別の国の人間なのかもしれないなとも思う。

その両親の顔すら知らないから確かめようもないしな。

確かめたところで、どうということもない。

だから、やっぱり髪の色などというものはどうでもいいのだった。

「さて……今日はどうすつかな……」

真面目に働くのも面倒くさいが、いい加減酒場のツケも溜まってきたしな。

こちらでそろそろ金になる仕事をしたほうがいいかもしれん。俺は師匠と違って借金を踏み倒すつもりはないしな。

まあ、金がなくても飲み食いするからツケが減らねえんだが。

「エレンさん！！ エレン・ブランデーさん、いらっしやいますか！？」

洗面所で今日の行動方針について考えていると、玄関のほうで大声がした。

朝っぱらからバンバンと扉を叩きながら俺の名前を呼ぶ声。

全く、どのどいつか知らないが近所迷惑も甚だしい。

「はああ……」

溜息をつきつつ、ぼりぼりと頭を掻きながら玄関へ向かった。のんびりと歩いている最中も、扉は叩かれ俺の名前が大声で呼ばれている。

この部屋はアパートの一室だ。

当然他の住人も住んでいる。

朝っぱらからの近所迷惑野郎の顔を拝んでやろうと扉を開ける。

「はいはい、どちらさ……あん？」

「エレ！？………き……」

扉の前にはなんか甲冑きた女兵士。

その後にはずらりと10人くらいの兵士がいる。

恰好からして王国兵士の奴らのようだが、俺に何の用だ？

酒場の店長やらが俺にツケを払えと文句を言いに来たならわかる。

だが朝っぱらから兵士が俺の家を訪ねてくる理由なんて心当たりねえぞ？

「き……き、き……」

「？……ああ」

なんだか目の前の女兵士が真っ赤になって口をパクパクとしていた。その眼は拳動不審ながらも俺の下半身に向いて……下半身？

そこで俺は自分が素っ裸なのを思い出した。

野宿の時なんかはさすがに服を着て眠るが、基本部屋で寝るときは裸で寝ている。

いつもは外に出る時には服を着てから出るんだがな。

珍しく朝っぱらから人からの来客でそのへん忘れてた。

そのせいで客人と俺の股間の一物がおはようございますしている状態になってしまっている。

頬をぼりぼりと掻きながら尋ねた。

「俺は服を着た方がいいですね？」

「！……！！！」

「んじゃ、ちょっと待っててくれ」

俺の言葉に無言で首を縦に振る兵士に、静かに扉を閉める。

とりあえず昨日脱ぎ捨てたままにしていたパンツとズボンを履いた。

そういや最近洗濯してないな。
無地の上着を着て、その上から黒のジャケットを羽織る。
うし、これで文句はあるまい。

「お待たせ、で、何の用で？」

「あ、あの……朝早くから押しかけてしまい申し訳ない！
自分たちは王国騎士団の者です」

俺が着替えている間にある程度冷静になってくれた女兵士が答えた。
いやまあ、言われなくても外見でわかるんだけどな？

「それはわかってんですけどね。で、用件は？」

「ベガ王国国王、バルザック・ベガ13世陛下の命によりお迎えに
ありがとうございました。

貴殿エレン・ブランデーに召喚命令が出ています」

「は？」

召喚命令？

俺が？

国王に？

……なんで？

1話 王からの依頼

特に国王直々に呼びつけられる理由が思いつかない。

だが、無視すれば後々ややこしいことになるに決まっている。
面倒くさいことこの上ないが、ここは大人しく従うしかない。

そう判断した俺は、案内されるままに王宮に足を運んだ。

「へえ……王宮だけあって豪華なもんだ」

さすが王都一の大きさを誇る建物だ。

この場所に來たのは生まれて初めてだが、どこを見ても絢爛豪華である。

まあ、王族が住んでいるだけでなく政治の中心にもなってるんだか

ら当然だけどな。

王族のやつらの趣味とか抜きにしても、どこの国に行ってもこのての建物は豪華なものだろう。

その国の象徴であるわけだから、それなりに豪華でなけりや他に舐められるしな。

無駄にでかい正門を通って石畳の道を進む。

玄關ホールに入ると、そこだけでちょっとした舞踏会が開けそうなほどに広い。

天井から吊るされているシャンデリアなど、値段を聞けば頭が痛くなりそうなものなのだろうな。

正面の階段を上り、右手に進んだ。

廊下の横幅だけでも俺の住んでいるちつぽけな部屋よりも広い。

そこここに飾られている絵画やら鎧やらつてのはレプリカだろうか？

それとも相当な価値のある本物だろうか？

前後を兵士に挟まれて大人しく歩きながら、ばれないように瞳に魔術を発動させる。

詠唱を必要としない初歩的な魔術で【解析】という。

瞳の中に小さな魔法陣を展開し、目で見たものを解析するのだ。

結果はどれも本物。

前王国時代のお宝や、その他もろもろ。

一つ売りさばくだけで家が一軒買える代物ばかり。

……どれか一つでいいからわけてもらえねえかな？……無理か。

「到着しました」

そうしていると、いつの間にか目的地に到着したようだ。

俺をここまで案内してきた兵士たち。

その先頭を歩いて俺を先導していたリースという女兵士が立ち止まる。

まあ、前を歩いている奴が止まれば自然と俺の足も止まる。

そこにあるのはどかい扉。

途中他にもいくつか扉を見つけたが、ここまででかくはなかった。感じからして謁見の間とかそんな感じか？

ここに来るまでと違い、明らかに緊張した面持ちで背筋を正す兵士さん。

恭しく扉をノックすると、中に声をかけた。

「王国騎士団第3師団所属、セシル・クロミッツであります。
陛下の命によりエレン・ブランデーをお連れしました」

「入れ」

「はっ！」

入室を許可する、っていうよりも命令する声に扉が内側から開いていく。

中には二人の兵士がいて、そいつらが扉を開け閉めしたりする門番のようだ。

セシルと名乗った女兵士の跡について俺も入室する。

謁見の間には王だけでなく、何人も人間がそろっていた。

扉からは赤い絨毯が敷かれており、その延長上に他より一段高くなっている王の座がある。

そこにはどつしりと恰幅のいいこの国の王が座っている……名前なんていったつけ？

正直日々の暮らしにしか興味はないし、いちいち王族の名前なんぞ覚えてねえ。

まあ王族なんて呼び名は王様だとか姫様だとか、役職で呼べばこれまで問題なかったしな。

隣にはもう一つ椅子があり、王妃さんが座っていた。

こっちの人はあんまり威厳とかなさそう。

その二人を挟むように、この国の王子っぽい（というか十中八九王子）と姫さんが立っている。

この国には現在王の子供は全部で5人いる。
無駄に子たくさんだことで。まあ、王なんて子供作ってなんぼでもあるしな。

王子が二人に姫が三人。全員が王と王妃の間の子供か、それとも妾の間の子供がいるのかは知らん。
一人一人の名前すら覚えていない俺が知っているはずもない。
そもそも興味ないしな。

「お前がエレン・ブランデーだな？」

「そうですが何か？」

とりあえず名前を聞かれたから応える。

いかにも俺の名前はエレンだ。それ以外の名前は持つちゃいない。
まあ、周囲が勝手につけるくだらない通り名ならいくつもあるが……

「貴様、陛下の御前だぞ！！ その態度はなんだ！？」

「良い。下がれネイド」

「しかし陛下！？」

「この者に礼儀を期待してはおらん。
実力さえあればこの際、そんなものどうでもよい」

「……承知しました」

俺があまり敬意を払っていないように見える態度だったからだろう

か。

俺の態度を見て怒る近衛騎士たち。

その中でもいの一番に食ってかかるネイドと呼ばれた騎士を王がなだめた。

しぶしぶ引き下がる騎士だったが、その眼は俺を今も睨みつけている。

金髪碧眼の無駄に整った顔をした野郎だ。

正直そこに突っ立っている王子二人よりも女にもてそうだ。

騎士なんてやってるだけあってくそ真面目なんだろうな。

俺とは気が合いそうもない。

反面、王は俺を値踏みするような目でこっちを見てるだけだ。

礼儀知らずな俺を特に責めるようなことはしない。

冷静にこちらの実力を測っているかのような感覚。

王様やってるだけあって威張り散らすだけでなく相応の器はもってるのかもな。

だが、王族の中でこちらを見定めようとしている人間は他にはいない。

姫さん達と王子達は俺を侮蔑の表情で見ていた。

これはあきらかに俺を育ちの悪いチンピラかなんかと軽蔑してるな。まあ実際チンピラ共と対して違いはないだろうさ。

育ちも悪いのは確かだし、ほとんど事実みたいなもんだからかまやしない。

……違うといえば、王妃の俺を見る目が他と違うが。

あれは何も考えてないやつ目の目だな。一人だけ花畑にでもいそうな空気を漂わせている。

「エレン・ブランドー。

お主をここに呼んだのは他でもない。

依頼したい仕事があるからだ」

「仕事？」

「そうだ。お主にはこの度我が国が召喚した勇者と魔王討伐の旅に出てほしい」

「勇者って……」

それに魔王討伐ときたもんだ。

魔王……それはここ20年程この世界をにぎわせている存在といった方がいいか。

それまでは数の少なかった魔物が、魔王が出現したとたんにあちこちから溢れ返った。

おかげで魔物による人的被害や家畜が殺されたりと、問題が多く出ている。

それまでは魔物の対応も騎士や軍の対応で十分だったのが、それだけでは手に負えなくなった。

といっても20年前の今と違う世界など、未だ20歳になっていない俺は知らない。

正直、俺のようなチンピラみたいなやつにはありがたいことこの上ないが。

おかげで冒険者なんて職業が認められ、血の気の多いやつらは喜々として魔物を狩りに出る。

かくいう俺もそれで日々の食いぶちを稼いでいる。

あと勇者ってのはおとぎ話に出てくる英雄のことだ。

大昔にこの大陸を苦しめた邪竜を退治したって話がある。

おそらく魔王と戦わせるために英雄として準備した人物なのだろう。

「我がベガ王国を始め、アルタイル帝国とデネブ共和国。

この三国連盟がこの度、それぞれの方法で魔王討伐を行うこととなった。

軍事力を誇るアルタイル帝国は軍事力によって。

デネブ共和国は自国の誇る錬金術と魔術を掛け合わせた魔道兵器を開発している。

そして我が国は、召喚した勇者を中心とした少数精鋭での突破を試みる」

「はあ、少数精鋭ですか……」

王の座から下は、絨毯の脇に壁に沿うようにして何人も人が立っていた。

見た感じこの国の重役たちだろう。

その他にも護衛の近衛騎士たちが数名。

こいつらも俺を値踏みするような視線を向けていた。

さっきからのこの視線は、俺が魔王討伐にたる人物が見定めようとしていたわけか。

しかし、何故俺なのか。

確かに俺は魔術においても、格闘術においてもそれなりに自身はある。

正直いつてこの街の冒険者やってる人間の中ではトップクラスと自負してはいる。

だが、魔術に関してならそれこそ王宮には専属の魔術師がいるはず。高い金払って雇ってるそいつらを使わずに、何故俺に声かけられるのか。

「まあ、俺が呼ばれた理由はわかりました。

しかし魔王討伐ですか……何故に王宮の魔術師にやらせないんです？」

正直この国は、先に出た帝国と共和国よりも魔術において頭一つ抜きんでている。

それこそ王宮に属している魔術師なら、それ相応に高い技術を持っているのだ。

「確かに王宮の魔術師たちは、高い魔術の知識と技術力を持っている。

しかし今現在旅に耐えることができる体力があるものがない」

爺と婆だけってことかよ。

「いや、体力だけならばなんとでもなろう。

問題は知識と技術力を持っていても実践経験が圧倒的に足りないものばかりなのだ。

これでは戦いになってもあまり役にはたちはすまい」

「……くっ!!」

この謁見の間には、壁に沿うようにして他の人間たちもいた。

王族とそれを守護する近衛騎士以外の人間たち。

おそらくこの国の政治やら何やらに関係している重鎮たちなんだろうが。

その中であきらかに魔術師なやつらが、俺を見ながら苦々しそうな顔をしている。

そいつらの体つきは、成程ほそくてもやしのようなのだ。

王宮内でお勉強だけしてきましたって感じだな。

どいつも俺に手柄となりそうな仕事を取られて悔しさを抑えきれないといった顔つきをしている。

まあ、実戦で使えない頭でっかちの魔術師じゃあ旅は無理だよな。

正直、新術の開発か戦争での固定砲台としか使い道はない。

俺がそいつらを見たのを確認したのか、王が口を開いた。

「……お主も見て理解しただろう。」

その点、お主は冒険者としてこの街でも1、2を争う実力をもつ魔術師だ。

さらに魔術師でありながら単独で仕事をこなし実践経験も豊富。実力では申し分ない」

「まあ、俺も自分の実力を王に高く評価していただけるってんなら悪い気はしませんが。」

それで魔王討伐に選ばれるのは光栄ってなものです。

……で、報酬は？」

「貴様！！ 図々しいぞ！！」

「下がれといっているぞ、ネイド」

「ぐっ……」

「お主はこの国に住んではいても私達に仕えているわけではない。命に関わる仕事を命令したとしても、褒美もなければやる気もおきんだろう。」

冒険者を雇うには金……誰もが知っていることだ。私もその辺は理解している」

「さすがは王様、よくわかりでいらっしゃる」

俺なりに恭しく頭を下げる。

しかしいちいち俺の態度が気に入らないのか。

さつきからネイドと呼ばれる騎士はあきずに俺を睨んでいた。

でも報酬に関して話すのは当然だと思うが？

魔王討伐なんて、普段の魔物討伐と違ってかなり危険な話だろうし。

相応の金が手に入らないなら引き受ける気はない。

「前金として金貨10枚、成功報酬で白金貨1000枚でどうだ？」

「これから旅をするのですから、前金はもう少し欲しいですね。
あとできれば成功報酬のほうも……」

こつちまでぎりぎりとネイドの歯ぎしりが聞こえてきそうだが、顔を真つ赤にして俺を睨んでいる。

王子二人も俺を金に汚い人間だと馬鹿にしている。

王妃や姫さんたちはそこらへんの交渉は何もわかつちやいないって顔だな。

だが、最初に報酬金額は低めに出して交渉するのは初歩の初歩だろうが。

徐々に値をあげてお互いの妥協点とする金額を決める。

こんなのは金に関する交渉術の基本だ。

そこらへん王様ってのはわかってないとかやってられないのだろうな。
俺が金額を高くしろと言っても特に気分を害した気配はない。

「旅の途中に関する資金は気にしなくてかまわん。

旅にはこちらのネイドも同行させるからな。

こやつに十分な金を持たせるから問題ない。」

……ちつ、あいつも一緒かよ。口には出さないが、内心舌うちする。
まあ、勇者として担ぎあげられたやつがどんな奴かは知らんが俺みたいになつと二人で旅なんてさせるわけもないか。

「しかし俺は今までこの王都を拠点として仕事をしてきました。

魔王がいるとされているのはこの大陸の最北端。

そこまでの旅となれば、それ相応に装備の準備もしなければなり

ません」

「む、そうか……」

前金以外の旅の装備で必要なものがあればこちらで用意させるが？」

「いえ、魔術師は兵士や騎士の装備とはまた違うのですよ。

同じように長期の旅で必要になってくる装備というのも違うのです」

本当は対して変わらない。

俺は基本格闘術と魔術の併用した戦い方だし。

食料は途中で何度も買いそろえる形になるだろうから最初から多くを用意することもない。

足りなくなれば現地調達でもできるしな。

装備も重苦しい鎧は好かん。

基本的に身軽で動きやすいほうが俺はいい。

必要なものなど傷薬や毒なんかの治療薬くらいだろう。

ようは口からでまかせだ。

「そうか、確かに魔術師は各自で使うものも違うといわれておるしな。

よかるう、前金は金貨20枚でどうだ？」

「死ぬかもしれない仕事なわけですから、成功報酬はまだしも前金
はもう少し……」

「ならば金貨30枚。

これだけあればこの王都ではほとんどのものは買えるだろう」

まあ、家やら宝石やら買い込むわけでもないしな。
これ以上は無理があるだろう。

この国の平民の平均年収は金貨15枚だ。
10枚から15枚あれば4人家族くらいなら暮らせる額である。

「そうですね、それでは前金は30枚で。

成功報酬は白金貨1000枚ということでしたが、できれば2000ほど欲しいのですが……」

「2000は多いだろう、よくて1500だ。

それだけあればこの王都で一等地の屋敷も買えるではないか」

「しかし失敗する可能性もあるわけですから、高くしていただければこちらのモチベーションも上がります」

「その時はその時だ。

我が国以外の二国も魔王討伐に乗り出している。

この旅が失敗したとしても他のどちらかが魔王を討伐するだろう」

「しかし我々が魔王を倒すことに成功すれば、後に三国間での発言権も強くなるでしょう。

投資としては十分かと思いますが？」

「フッ……わかっておるではないか。

そうだ、出来ることならば我が国が魔王を討伐したいと思っておる。

それが成功すれば三国連盟における我が国の立ち位置は二国を抑えるものとなるからな。

しかし雇っているものはお主一人だけではない。

お主一人に白金貨2000枚は多すぎる」

「では1800で」

「1700だ」

「1600……これ以上はさすがに引き受けられません」

「……よからう。お主への成功報酬は白金貨1600枚だ。
他の者も同様にしよう」

「ありがとうございます」

まあ、妥協点としてはそんなものだろう。

俺以外も雇うというのであれば、王国側もさすがに俺だけ報酬が高いというわけにもいかない。

自然、同じ額が他の奴にも支払われることとなる。

何人同行するのかは知らんが、合計すればかなりの額になるだろう。出来る限り低くしたいというのはわからんでもない。

それに俺も金は好きだが豪華な暮らしがしたいとわけでもないしな。好き勝手に酒飲んで飯食って、暇なときに女の一人でも抱ければ十分だ。

白金貨1600なら、働くことなく一生遊んで暮らせるだろう。

そうなったら冒険者からも足を洗うかな。

まあ、成功するまえから考えてちゃ皮算用もいいところだが。

「では、勇者とともに旅に出る者と顔合わせといこうか。

ネイド・ウィースキー。ユイリィ・カクテル。

両名、前に出よ」

王の命令に二人の人物が一步前が出る。

一人はさつきから俺にガンたれてるいけない騎士だ。

こいつと一緒に旅するんだよなあ……先が思いやられるな。

もう一人は家臣団や近衛騎士たちに混じって壁際に並んでいた人物。腰まで伸びる金髪にすらりとした体躯の女。

そのはかなげな美貌も人目を引くが、何より俺が気になったのはその尖った長い耳だ。

「近衛騎士にエルフの姉ちゃんねえ……」

「正確には私はエルフではない。

父親は人間で母親がエルフのハーフだ」

そう言っただけ彼女は俺の前まで歩いてきた。

ハーフね。しかしその血はエルフの血を濃く受け継いでいるようだな。

半分しか血が流れていないなら年齢はどうかかわらんが、容姿だけなら完璧エルフである。

俺も実際にエルフを見たことはないが、その特徴はかなり有名である。

全身的に細くしなやかな体躯を持ち、黄金に輝く金糸のごとき髪をもつ。

肌は白く、どこか儚げな美貌を宿しているという。

それだけならば美人の人間と大差ないが、寿命は人間の約10倍。

そして外見的特徴で最も目立つのが先のとがった長い耳というわけだ。

これだけ外見の特徴が一致しているのだ。

実年齢が容姿と比例しているとは限らない。

「お前、今私の年がいくつか考えただろう？」

俺の方をいぶかしげに見るユイリイというハーフエルフ。どうやら彼女には俺の思考が駄々漏れらしい。

もしくは、彼女に出会った男は皆同じような考えを持つのかもしれん。

「わかんのか？」

「わからいでか。」

全く、男は皆そうやって女の年齢をすぐ怪しむな」

「まあ、悪気があつたわけじゃないんだ。

すまねえな、俺はエレン……エレン・ブランデーだ」

俺が差し出した手を彼女が握る。

握手しながら、ユイリイは不敵に笑った。

「お前がどの程度できるかは知らんが、期待しているぞ？」

「まかせな、俺は女の期待には応える主義だ。

あんたもその背中の弓、腕の方楽しみにしてるぜ」

「フツ、口の軽い男だ」

にやにやとお互いに笑い合い、軽口をたたく。

なかなかどうして、面白そうな姉ちゃんじゃないか。

エルフは頑固で気難しい気性をしてると聞くが、この辺はいい感じに人間の血が流れていると言える。

「それで、ネイドつつったか？」

「……ああ」

相変わらず仏頂面で俺のことを睨んでやがる。

あーあー、これから嫌でも一緒に旅すんだから、最初くらい嘘でもいいから笑顔作って見せるよな。

こいつ顔はム力つくほど整っているが、正確がこれだけ固けりや女にはモテねえな。

俺よりいくつか年上だと思うが、あれは絶対童貞だな。

「ま、これから一緒の旅なんだ。

嫌だと思っても仕事だと割り切りな」

「貴様に言われるまでもない。

だがエレン・ブランデー……役に立たないと判断した時は容赦なく置いて行くからな。

せいぜい勇者殿のお役に立てるよう働くことだな」

「へいへい」

おーおー、固い固い。頭でっかちな野郎だ。

俺を育てたくそ爺が言ってたぞ？

男が固くて女に喜ばれるのは下半身だけだったな。

「近衛騎士やってるくらいだ、剣技にはそれなりに自信があるんだろ？」

「当然だろう、貴様のようなチンピラと違ってちゃんとした訓練を積んでいる。

むしろお前の方が心配だな」

「はあ？」

「そのような若さで、しかも魔術師でありながら冒険者の1・2を争う實力だと？」

陛下は貴様を買いかぶりすぎなのだ。

大体、後方でぶつくさとやっているしか能のない魔術師が実戦で何の役に立つ？」

「あー……」

典型的な魔術師を馬鹿にするタイプの人間か。

こういう前衛バリバリのやつには、魔術使う者を馬鹿にするのがいるんだよな。

ちんたら詠唱してるうちに戦闘が終わると考えてるんだろつ。

「すまぬな、ブランデーよ。」

このネイドは腕は立つ上に真面目なのだが、少々固い性格をしておつてな……」

「……ぐっ」

あらら、王の目の前で喧嘩腰で離すもんだから。

そんな真っ赤な顔でこっち睨むなよ、お前が恥掻いたのは自業自得だろうに。

「まあよい。話を先に進めるぞ。」

お前たちには基本的にこの三人と、勇者を合わせた四人で旅に出てもらつ。

あまり人数が多くても動きづらいだろつからな。

もし旅に同行させたいという實力者がいたら、各々の判断で連れ

ていくがよい」

謁見の間の中央で顔を合わせて突っ立っている俺たち三人。
それに勇者か。

「誰か、勇者をここに連れてまいれ」

「ハッ!!」

王が命令すると、扉付近にいた門番が外にいた人間に命令を伝えた。
近くの部屋で待機していたのだろう。
すぐに到着したのか、扉がノックされる。

「セシル・クロミッツであります。勇者殿をお連れいたしました！」

「うむ、通せ」

俺の時と似たようなやり取りの後、扉が再び重々しく開かれる。
扉の先に立っていたのは兵士を後ろに従えた一人の女。
身長や体つきから判断して、10代後半といったところか。
物珍しい、少なくとも俺は見たことのない服を着ていた。

紺色のスーツの上……なのだろうか？

スーツにしてはゆったりとした印象を受ける上着。

そして少し固めな印象を受ける布地のスカート。

靴は上等な、貴族の履くような艶のある皮靴。

全体的にドレスのような上品な印象を受ける。

まあ、舞踏会に着る雰囲気じゃないし、それにスカートの丈が短く
もあるな。

貴族のお嬢さんってのは普通、膝が出る丈のスカートは履かねえし。
その細腕で振り回せるのかってくらいの大剣を背中にしよっている。

なんだか外見と武器とのギャップがすさまじいな。

俺たち謁見の間にいる人間の視線が彼女に集中していた。

そのせいか、気圧されたように不安な表情を浮かべている。

皆勇者とかいうことで期待しているのだろうが、こんな女で大丈夫だろうか？

もつとガタイのいい戦士みたいなのを想像していただけに予想外である。

しかし、俺にとってはもつと予想外なことに意識が集中していた。

「黒髪……」

そう、勇者の髪の毛は、いや、瞳の色も。

この大陸では珍しいとされる黒。

俺と同じ色をしていた。

「あ……」

彼女からも、金髪や茶髪に混じって黒い髪をもつ俺が目立ったのだろう。

自然、見つめあうような形で目が合った。

俺の顔を見て、不安をたたえていた瞳が徐々に驚愕の色に変わる。

「お兄ちゃん？」

「あ？」

俺を見た勇者の口から洩れた言葉は、【お兄ちゃん】だった。

……なんでだ？

2話 旅立ちの準備1（前書き）

更新がだいぶ遅くなってしまいました。

本来は2話をもっと長くする予定だったのですが、

それだともっと遅くなるので、途中で切って投稿しました。

2話 旅立ちの準備1

背中にかかる長さの黒髪をまっすぐにのばした少女。

それが勇者として紹介された人間だった。

体格から10代後半と思えるが、顔も整ってはいるが童顔で幼く見える。

どちらかといえば彫りの深い顔立ちの多いこの国の人間と違う。

ここらじゃ見ない顔立ちだし、なんというか民族的に違う雰囲気とでも言うのか。

礼装のようでありながら、どこ珍妙な印象を受ける衣服を着ている少女。

どっからどう見ても、おとぎ話に出てくる勇者のようには見えない。唯一それっぽいところなど、背中に背負った身の丈に合わない大きな剣くらいか。

そんな彼女が「お兄ちゃん」と俺のことを読んだ。

意味がわからん。

俺にこんなでかい妹などいない。

「なんで、なんでお兄ちゃんがこんな所にいるの!？」

俺の顔を認識した勇者が、俺の元に駆け寄ってきて問い詰めてくる。その内容になんとなく理解した。

そつだ、おそらく彼女の兄にあたる人物に俺がそっくりなのだろう。

「あー……たぶん人違いだと思っぜ？」

俺はあんたに会ったことすらねえからな」

「……え？」

「よく見てみな。俺はあんたのお兄ちゃんとやらじゃない」

「……お兄ちゃんじゃ、ない……」

俺よりも頭一つ低い勇者は、下から覗きこむようにこちらを見つめた。

やがて人違いだったことを理解したのか、一步後ずさって俺から距離を取る。

その様子は納得して落ち着いた反面、期待と違って落胆しているようでもある。

「……ハア」

「んだよ、溜息つくこともねえだろうに。

そんなにそのお兄ちゃんとやらと俺は似てたのか？」

「へ？……ああっ！？ すいません！！

私っしたら見ず知らずの人にいきなりお兄ちゃんなんて！！」

俺の気分を害したと思ったのか、顔を赤くしてぺこぺこ謝る少女いや、別に俺だって人を間違えたことくらい経験あるしよ、怒っちゃいねえよ。

「そうですよね、この世界に私のお兄ちゃんがいるはずないですよ
ね」

「この世界……？」

それはちよつと大袈裟じゃないか？」

この女はこの街の出身じゃないのだろうけど。

昔から王都に住んでる俺は、自分と同じ黒髪をこの街で見たことはないしな。

こいつもこの街出身なら見たことくらいあるはずなんだ。

おそらくは別の町か村から呼びつけられたんだろう。

しかし、それにしてもこの『世界』というくりはさすがに大袈裟だろう。

そう疑問に思ったが、この問いかけに答えたのは彼女ではなく王だった。

「ブランデーよ。その勇者が言っていることは別に大げさではない。」

……そう言えばまだカクテルにも教えていなかったな。

何を隠そう、彼女は我がベガ王国がこの度、力を借りるために異世界から呼び寄せたのだ」

「異世界い？」

「そうだ、お前たちにはにわかには信じられんかもしれぬがな。

この国には秘伝とされておる召喚術がある。

かつてこの大陸を暴れまわったとされる邪竜を倒したのも、異世界から召喚したものだっただけだ」

「……………」

なんともまあ、えらく荒唐無稽な話になってきた。

異世界とか言われても、「はい、そうですか」と簡単には信じられない。

隣に立つハーフェルフのユイリィも、俺ほどではないが驚いている

表情だ。

「今日は顔合わせのために呼んだのだ。

勇者よ、この三人はお主とともに旅に出るもの達だ」

「は、はい！ え、えっと……この度勇者として召喚されました！
大山崎舞です。よ、宜しくお願いしましゅ！！」

「……噛んだな」

「……ああ、噛んだ」

「はう！？」

人見知りなのか、慌てながらも自己紹介をした勇者。

しかし最後の最後で舌を噛んだようだ。

その様子に俺とユイリイは少し不安になってくる。

このオオヤマザキマイという少女には、物語に伝え聞く勇者の貫録
が一切見られない。

本当に大丈夫なのだろうか？

「あー……オオヤマザキマイだっけ。

その名前ってどこからが名前で、どこからが姓なんだ？」

「あ、あの舞が名前で、大山崎が姓になります」

「ほう、逆なのだな……お前のいたところではそこらへんの文化も
違うのか」

ユイリイが何か面白そうな眼でマイを見ている。

まあ、これだけで異世界から来たと考えるのは早計だとは思うが。身につけているものも見たことがない衣服だし、何より王がそう言っているのだ。

王が真面目な顔して異世界から召喚したと断言していることだし。胡散臭かろうと、ここはそういうものだとは割り切ったほうが無難だろう。

「そうか、名と姓が逆なんだな。

だけどこれからは名乗るときはこっち風で言った方がいい。

いちいち説明しにやらんしな、その方が余計な混乱を生まんですむだろ」

「あつ、はい。郷にいつては郷に従えですね」

「?……まあ、何か知らんがそれで」

よくわからんが、こいつの故郷での格言かなんかか？
本人が納得してるなら俺はそれでかまわんが。

「ちなみに俺はエレン・ブランデー。エレンと呼んでくれて構わない。

一応冒険者で魔術師をやっている……これからよろしくな」

「私はユイリイ・カクテルだ。ユイリイと呼んでもらっている。同じく冒険者をやっている弓を得意としている。

女同士仲よくしようではないか」

「あつ、はい！ よろしくお願いします。

じゃあ私もマイと呼んでいただければ結構です!」

「……」

緊張しながらも明るく挨拶するマイ。

俺たちが……というよりも俺の対応に文句があるのかこちらを見て眉根を寄せるネイド。

なんだよ、なんか文句あるなら言えよ。

「魔王討伐への旅立ちは二日後とする。

今日と明日の間に、各自で旅の準備をするように！」

王が顔合わせもすんだと判断したのか、この場の会合はこれで終わった。

椅子から立ち上がり、パンパンと手を鳴らすと大臣っぽいやつの一
人が二つの袋を手にしてやってくる。

俺とユイリイはその袋を受け取った。

中身は先ほど交渉していた前金の金貨30枚だ。

何枚か手にとって感触を確かめる。

まあ、王ともあるう人間が偽物つかませるようなちゃっちい真似は
せんだろうが。

うん、確かに本物の金貨だな。

やっぱり金の重みってのはいいもんだ。

「二日後の朝、迎えをやる。

それぞれ今の部屋にその時間はいているようにな」

「了解」

「承知した」

前金を手にした俺たちは、ここまで案内してきた兵士に連れられて

謁見の間を後にする。

部屋から出る際、振り返ってこの場に残る王族達に軽く頭をさげた。それから、同じく残るだろう勇者であるマイと近衛騎士のネイドに声をかける。

「それじゃ、二日後にまたな」

2話 旅立ちの準備1

あの後俺はすぐに自分の部屋のあるアパートまで戻った。

放っておけば臭いを放つゴミを捨て、旅に必要なものを確認する。今回は長期の旅ということで、いつものようにほとんど手ぶら同然というわけにはいかない。

久しぶりに肩にかけられる大きめの袋を持ち出した。

普段の腰のポシェットじゃあ、あまり容量がないしな。

あとは、魔王討伐ってくらいだ。

順当に旅が進めば待っているのは魔王その人……いや、人かどうかは知らんけど。

しかし今までのそこの雑魚よりは強いことは簡単に想像できる。

俺は魔術と体術主体だし、特にこれと言って武器はいらない。

今は修理に出しているが魔術の補助用のグローブもある……もう完成してるだろうから今日あたり取りにいくか。

ああ、あと短剣くらいは欲しいかもしれん。

戦闘に使わなくとも、旅の間で重宝するだろう。

よし、短剣と軽めの防具でも買うか。

そう思い、渡された前金を持って部屋を出ようと玄関の扉を開けた。

「……」

そこにいたのは、先ほど謁見の間で確かに別れたはずのマイ。

あと、道案内として同伴したのか、朝に俺を迎えにきたセルとかいう女兵士も一緒だ。

ちなみに女二人だけならまだいいのだが、何故かネイドの野郎も一

緒である。

旅に出れば嫌でも顔合わせるつつうのに……なんでいるんだ。
確かに先ほど、「二日後に」と言って別れたはずだ。

最低でも二日後の朝まではむかつく顔を見なくてすむはずだったと思っただけだな。

マイ達は、丁度俺の部屋の扉をノックしようとしていたらしく顔をはち合わせる形となった。

「……で、なんであんたらがここにいるんだ？」

何かさっきの会合で伝え忘れたことでもあったのか。

それだけなら別に勇者が音も連れて直々に来なくても、使いをよこせばいいだけだろうに。

「あ、いえ……よかつたら旅の前にもう少しお話できないかなあって思いました」

「私は勇者様の案内です」

「私は勇者殿の護衛だ」

「……あつそ」

お話ねえ？

別に今話さなくても、旅に出れば嫌でも話す機会なんざいくらでもあるだろうに。

なんというか、もの好きな嬢ちゃんだ。

「話ねえ……普段なら部屋に入って話すかって感じだと思っけどな。」

俺今から旅に必要な物買いに行くつもりだから時間ないんだわ」

部屋は散らかっていて汚いし、そもそも俺は自分の部屋に他人を上げるのが嫌いだ。

買い物に行こうとしていたのは事実だが、正直口実でもある。

俺は暗に面倒臭いから帰ってくれないかという雰囲気を出してみる。その雰囲気をしっかり読み取ったのか、セシルは困ったような表情をしていた。

ネイドの視線は、相変わらず俺のことが気に入らないといったものだ。

勇者の申し出を断ろうとしているからか、その嫌悪感も3割増といった具合である。

しかし二人とは対照的に勇者であるマイは、俺が暗に帰れと言っていることに気がつかないようだ。

それどころか俺が今から買い物に出掛けると聞いて、いい切っ掛けができたと言わんばかりに話を勧めてくる。

「買い物ですか！？ 私この世界の買い物ってまだしたことないんです！

ついていてもいいですかー！」

「はあ？」

何、なんでマイはこんなに楽しそうなんだ？……というかついてくる気かよ。

俺が嫌そうな顔をしたのがわかったのだろう。

マイの表情が不安げなものに変わる。

「駄目ですか？」

……なんでそんな捨てられる犬みたいな顔すんだよ。
さつき会ったばかりの他人に、なんでそこまで興味が……ああ、お兄ちゃんとか言ってたな。

あれか、俺が拒絶するとまるで自分の本当の兄に見捨てられる感じがするとかか。

いくら俺がこいつの兄貴に似てるとしても、別人なんだから重ねられても面倒くさいだけなんだが。

面倒くさいから断ろうと思ったんだが、意外な所からマイへの援護の声が出た。

いや、意外ってわけでもないのか？

「なんだ、もしかして王より頂いた金を我々に見せられないようないかがわしいことに使う気ではないだろうな？」

「ああ？」

「旅に必要なものを買うだけなのだから、我々が同行しても問題はあるまい。」

それとも何か？ 本当にいかがわしい店にでも行くのではあるまいな？」

「ええ！？ そうなんですか！？」

「……んなわきゃねーだろうが」

ネイドの野郎はマイの味方ってか。

マイが俺についてくることがなければ、こいつも俺と一緒にいる必要はないわけで。

てつきり俺は、この男は俺のことを嫌っているから必要以上に俺と一緒にはいなくても済む方向に話を進めると思っていたんだが。

ここで一緒に来ることを拒めば、俺はいかがわしいことをしようとしていることになってしまう。

別にこいつにどう思われようが関係ないが、これから一緒に旅する女に最初から変に思われるのも避けたい。
内心舌うちしつつ、許可するしかなかった。

「よかったですね、勇者殿」

「あ、ありがとうございます」

「……はあ、面倒くせえ」

こちらを小馬鹿にする顔をしているネイドがむかつく。

俺はため息を小さくつつきつつ、頭をぼりぼりと掻くのだった。

「わあ」

さつきから市場の中をきよろきよろとあちこち見まわるマイ。

まるで初めて王都にやってきた田舎者みたいで、正直見ていて恥ずかしい。

そんなマイは珍しい服装をしているうえに、背丈に見合わぬ大剣を

背負っている。

更には王国兵士の鎧を着た女に、近衛騎士の男が一人。それをひきつれているのは、自分で言っていて悲しくなるが育ちのあまりいいとは言えない男。

かなり目立っていて市場の視線を独占している状態だ。

正直、こつも好奇の視線を向けられては気持ちのいいものではない。

「おいマイ、目的の店があるのはこの市場じゃないんだ。
あまりうるちよろすんな」

「あつ、はい。すみません」

うるちよろ見て回るなら、あとで勝手に一人で見てまわれ。

そもそも、この市場は一般の人間も多くいる店が立ち並んでいる場所だ。

食料品や日用品が主に取り扱われている。

俺が今回買おうと思っている品々は、この市場を抜けた先にある商店の並ぶ区画にある。

正直、俺としては今はこの市場には用はない。単なる通り道にすぎない。

「すごい活気ですね」

「そらまあ、ここは王都の中でも一般人が一番多く訪れる場所だろうからな」

「でも市場なら、こんなに狭い道じゃなくてももっと広い道を使えばいいと思いますけど……」

「そしたら人混みももう少しましになると思いますし」

「狭いって……この道は横幅5メートルはあるぜ？」

正直、この王都の中では王宮前の通り以外では一番広い。
たしかに様々な店が両脇にあつて狭く感じるかもしれないが、他だと人もまともに通れなくなるはずだ。

「勇者殿、この道はこの王都の中で一番広いのですよ」

「えっ、これですか？」

「これでって……お前のところじゃもつと広い道があるのか？」

「はい。この道の倍は普通にありますよ」

「倍って……」

単に土地が有り余っていると田舎なのか。

それとも、異世界とか言っていたからここよりも整地や区画整理が
しっかりとしているのか。

正直判断に迷うな……

なんとなく、隣を歩く彼女を観察してみる。

服も珍しい素材でできているみたいだし、単純そうに見えてかなり
複雑な作りをしている。

髪の毛は俺同様、珍しい黒髪。

おそらく身長や体格から成人はしているだろうと思う。

だが、顔立ちが童顔なせいかわ15歳を超えているかは微妙か。

どっちにせよ、あまり見ない顔立ちではある。

通りに立ち並ぶ店に並べてある商品を見ては物珍しそうに眺めている。

正直、こんなものの何が珍しいのかというものにまで反応していた。

この市場に並ぶものなんて、それこそ大陸中のどこの町でもありそうなものばかりだ。

だがマイの並んでいる商品を観るその様は、見るものすべてが初めてであると物語っている。

異世界かどうかは知らないが、こいつがここよりもかなり違った場所から来たのは間違いないと見ていいのか。

……まあ、異世界だろうが外国だろうが俺の仕事内容に変化はないから別に構わないんだけどな。

そのまま、彼等を引きつれて歩き市場を抜ける。

すると今度はレンガ造りの建物が立ち並ぶ一画に出る。

ここら一帯は主に冒険者を対象とした店が集まっている区画だ。

武器に防具、薬草から魔術の媒体など様々なものを取り扱っている店がある。

その中にある店の一つ、ムゲロ魔術骨董店。

俺がひいきにしている店の一つで、主に魔術に関するもんを取り扱っている。

建物の外見は他の店に比べてボロイし汚いが、商品に関してはなかなかもんだ。

扉を開けて入ると、店の受付にいつもどおりよぼよぼの爺が座っている。

「よお爺さん、グローブの修理は完成してるか」

「……」

「そうか、なら確認させてくれ」

「……」

俺の言葉に、爺さんは少し危なげながらも立ち上がり店の奥に入っ

て行った。

待ってる間にマイが話しかけてきた。

「あの、エレンさんはあのお爺さんが言っていることがわかるんですか？」

「おう。初見じゃわかりづらいかもしれんが一応あれで話してんだぜ。

年のせいかな声の大きさがかなり小さいから慣れてねえと上手く聞き取れないかもしれないけどな」

「そうなんですか。

私には何か喋ってるようにすら見えませんでした」

「ははっ、外見はぼけが始まった爺に見えるだろうけどな。

腕は確かだぜ。俺も冒険者を始めてから魔術関係の品はほとんどここで仕入れてる」

「そういえばグローブの修理って言っていましたね」

「ああ、俺はいつも特別製のグローブを使ってるんだわ」

「特別製ですか？」

「裏地に魔力を節約させる術式が描きこまれていてな。

そいつを使っていると、魔術を使用した時の消費魔力を少しだけ抑えることができるんだ」

「へー」

俺たちは他愛もない話をし、付いてきているセレナとネイドは店の中を見て回っている。

こいつらも兵士と騎士だから、こういった魔術関連の店に来ることはあまりないのだろうな。

そうこうしているうちに、爺さんが俺のグローブを持って店の奥から出てきた。

「……」

「相変わらずいい腕してんな。

破れた術式のところもすっかり元通りに書きこまれてる」

「……」

「おう、じゃあ試させてもらうぜ」

爺さんの言葉に、俺は受け取ったグローブをはめる。

このグローブは一見ただのノーフィンガーグローブにしか見えない。黒い布地で、指と掌の中心には布が纏っていない手袋だ。

しかしその裏地には、びっしりと細かい術式が描きこまれている。小さな火の玉を想像して掌に具現化する。

すると、ほとんど何の抵抗もなく手の上に小さな火が生まれた。

「わあ、すごい！」

その光景に、マイが楽しそうにはしゃぐ声をあげた。

「すごいかな？ 単なる火種を産むだけの初歩魔術だろ？」

正直、これだけなら魔術師でなくてもちよつかじっただけの知識

の奴でも可能のはずだ。

戦闘にも使えないし、焚火を起こす時の火種としてくらいにしか使えない。

火打ち石があれば、使えても使えなくても変わらないしよばいものである。

「だって手のひらから火が出るんですよ!？」

「いや、そりゃ魔術使ったんだから出てもおかしくないだろうに」

マイはたったそれだけのことに騒がしく興奮している。

セレナとネイドは、火のことは当然と特に驚いてもいない。

魔術師を嫌っているらしいネイドも、この程度の魔術では対して感情も変化しないだろう。

騎士の中にも、この程度なら扱えるやつが何人かいるだろうしな。むしろ二人ともマイの興奮度合いに苦笑していた。

「私、こういういかにも魔術って感じの見るの初めてです!」

「お前の前にいたところじゃ見られなかったのか?」

「はい。私のいた世界じゃ魔術や魔法ってなかったですから」

魔術がない?

それはまた……なんとも不便な世界なことだ。

俺は実際に自分が魔術を使えないことを想像し、その不便な様にため息が出た。

そりゃあこんなものでも興奮するか。

彼女が言っていることが本当であるという証拠はどこにもない。

しかし、俺にはマイが嘘を言っているようにも見えない。

これで演技なら凄いなと思うが、こいつが俺を騙した所でなんの益もないことだしな。

……言っちゃ悪いが、そもそもとして彼女は人をだますことに向いてなさそうだしな。

善人とか悪人とかじゃなく、人を騙せるだけの知能がありそうとも思えない。

本人を前には言わないが……まあ、そこまで賢そうには見えなから。

なんとなくセレナを見る。

すると、俺の言いたい事を理解したのか答えてくれた。

「勇者様の言っていることはおそらく本当ですよ。

彼女のいた世界では、魔術の代わりに他の技術が発展していったとのことですよ」

「他の技術……ねえ」

まあ、もし魔術がないならそうなるだろうな。

人間ってのは常に利便性を求める生き物だ。

俺たちでいうところの便利な技術が魔術である。

それがない以上、代替として他の技術の向上を模索するだろうことは簡単に想像できる。

「科学っていうんですけどね。魔術と違って……」

「ああはいはい、別に興味無いから。

また時間がたっぷりある時にでも聞かせてくれや」

説明しようとするマイの言葉を遮り、爺さんとの交渉を再開させる俺。

そんな俺の態度に、不服なのか若干頬を膨らませるマイであった。
いや、だってこいつの元いた場所がどんな所であっても俺には関係ないしさ。

そついうどうでもいい話は、これから一緒に旅してりゃいくらでも時間があるんだから。

暇つぶし程度に聞くのが一番である。

「……」

「ああ、仕上がり文句はねえよ。
いつも通りの金でいいか？」

「……」

「ついでに、今日は薬もくれ。
そうだな……ミナシ草の粉末を200クルムと、ゲドの丸薬を20個で頼む」

修理代がいつも通りで銀貨50枚。

この店での予算は金貨一枚までって考えてるし、薬もいくつか買っておくことにした。

魔力回復に使えるミナシ草の粉末と、解熱作用のあるゲドの丸薬を購入しておく。

「……？」

「ああ、長期の仕事が入ってな。
しばらくは王都には戻ってこないだろしな」

まあ、失敗すれば戻るもなにも死ぬだろう。

そうなれば戻ることもできんから、今日でお別れと言えはそうかもしれん。

といつても、冒険者なんていつ死んでもおかしくはない職業だ。まあ、いつもと変わらんといえは変わらんかもな。

「……」

「おつ、いいのか？ 悪いな。」

「じゃあ修理代と薬代、合計で銀貨92枚だな」

「これはありがたい。」

本来なら、皮で作った袋に入れるんだが保存のいいビンに入れてくれるらしい。

ビンに入れるとその分の代金もつくから高くなるんだが、そこは饒別でサービスだよ。

爺さんにとつても俺は常連客だしな。

これからもお互いいい関係でいたいもんだぜ。

「じゃあ、金貨一枚で……」

「……」

「おつ、死ぬ気はねえよ。」

戻ってきたらまた顔出すからよ、爺さんも俺が戻らねえうちにぽっくり逝くんじゃねえぞ？」

「……」

「はっ、違えねえ」

俺は釣りの銀貨8枚を受け取ると、軽く別れを告げて店を出た。

2話 旅立ちの準備1（後書き）

次は旅立ちの準備2です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290x/>

魔術師な俺と勇者な女

2011年10月31日14時24分発行